

第5章 沖積層

(米岡佳弥・野々垣 進)

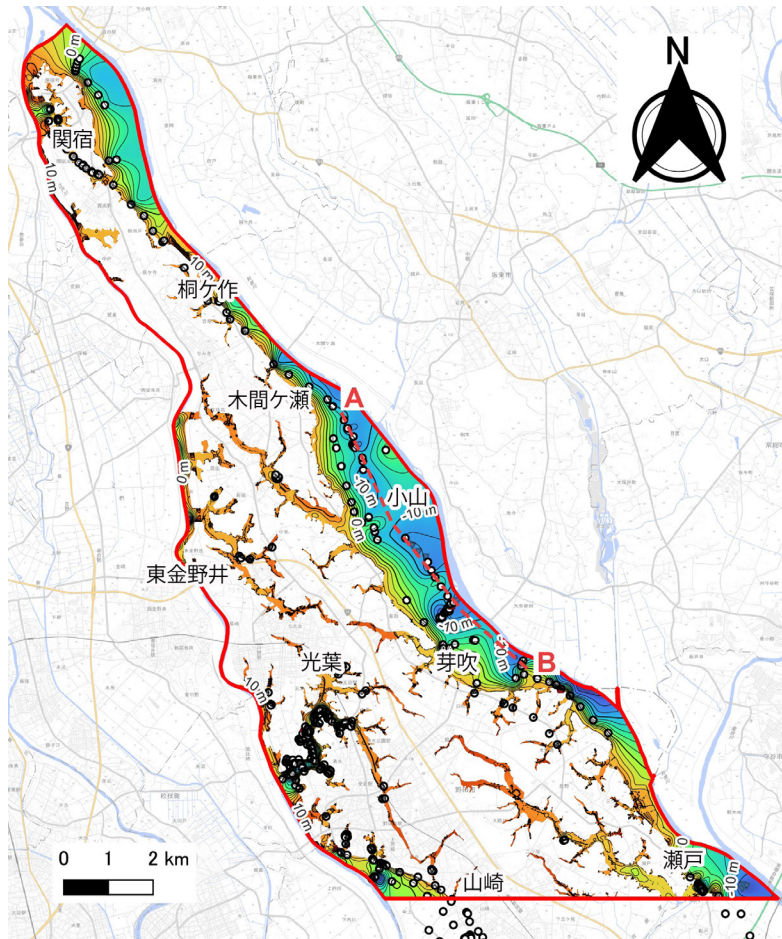
本調査地域の沖積層は下総台地の西側の中川低地、東側の利根川低地、及び台地を開析する小規模な河川沿いの谷底低地に分布する。これらの低地下には最終氷期に形成された埋没谷が存在し、沖積層はこの埋没谷を埋めるように分布する。

5.1 中川低地

中川低地は本調査地域と埼玉県大宮台地の間に広が

る大規模な沖積低地である。低地の幅は下流域ほど広く、最大で10 kmを超える。また、中川低地の埋没谷の基底の標高は-60~-30 m程度である(米岡ほか, 2025)。一方、中川低地の下流側に位置し、下総台地と武蔵野台地に挟まれる東京低地では、荒川河口付近で埋没谷の基底の標高が-70 mに及ぶことが報告されており(納谷ほか, 2021)、中川低地の埋没谷はこれに比べて浅い。

本調査地域に含まれる野田市山崎西部は中川低地の東縁部に相当する(第1.1, 1.2図)。この地域に分布す



第5.1図 沖積基底の標高分布。

単位はT.P.+ m. 赤枠は本調査地域の範囲を示す。このうち沖積層は等高線を示した範囲に分布する。丸、三角、逆三角のポイントは基底面のモデリングに使用したボーリングデータ地点を示す。丸ポイントは指定標高が基底面に相当するデータ地点、赤色の三角ポイントは指定標高よりも上に基底面が存在するデータ地点、青色の逆三角ポイントは指定標高よりも下に基底面が存在するデータ地点。背景図は地理院タイルを使用。赤破線ABは第5.2図の断面図の位置を示す。中川低地及び利根川低地の位置は第1.1, 1.2図を参照。

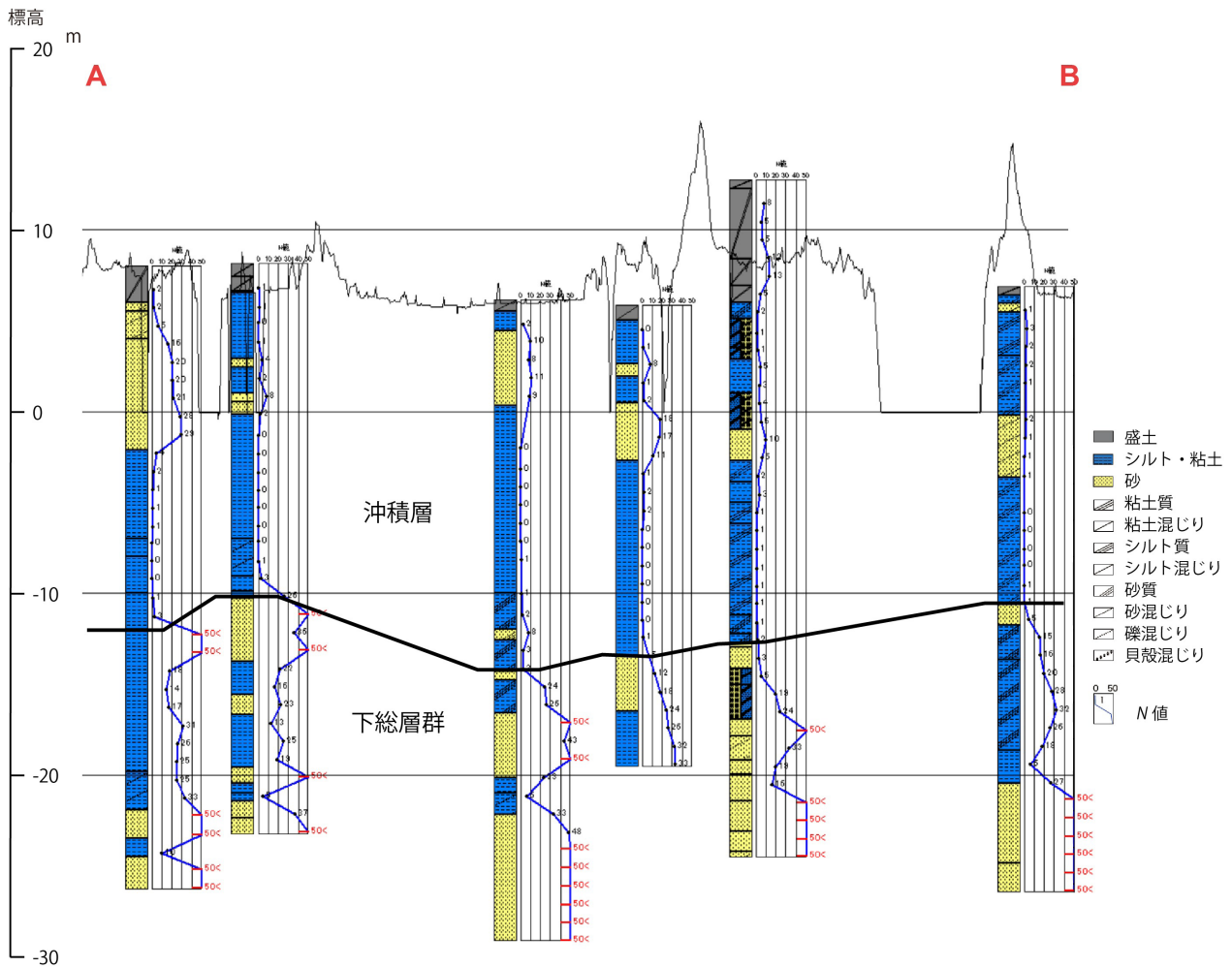
る沖積層の基底面の標高はおよそ 0 m であり、層厚はおよそ 5 m である (第 5.1 図)。基底礫層は認められず、泥層を主体とする沖積層が下位の下総層群を不整合で直接覆う。沖積層と下位の下総層群の間にローム層は認められない。沖積層の泥層の N 値は 0 ~ 3 であることが多い。

5.2 利根川低地

利根川低地は利根川沿いに広がる沖積低地であり、本調査地域は利根川低地最奥部にあたる (第 1.1, 1.2 図)。野田市内の利根川低地では、産総研によって掘進長が 20 m 以浅の沖積層コアが複数掘削されている。田辺ほか (2016) 及び Tanabe *et al.* (2022) によれば、当該コアは下位から順に、貝化石を含み生物擾乱を強く受けたシルト層を主体とする内湾堆積物、植物根痕

を含み有機質シルト層を主体とする下部湖沼堆積物、斑点状の生痕化石が認められるシルト層を主体とする上部湖沼堆積物、植物根痕を含み上方に細粒化する砂層を主体とする汽水の影響する河川チャネル堆積物、シルト層及び細粒~中粒砂層を主体とする現世河川堆積物が累重することが報告されている。ただし、当該コアは沖積層基底まで到達していないため、本報告の基底面推定には用いていない。

野田市関宿付近では沖積層基底面の標高が -5 ~ 0 m 程度であるが、野田市木間ヶ瀬~小山~芽吹付近では標高 -15 ~ -10 m に分布する (第 5.1 図)。本調査地域に分布する沖積層は泥層を主体とし、泥層の N 値は 0 ~ 3 であることが多い (第 5.2 図)。基底礫層は認められず (第 5.2 図)、泥層を主体とする沖積層が下位の下総層群を不整合で直接覆う。沖積層と下位の下総層群の間にローム層は認められない。



第 5.2 図 利根川低地の沖積層の断面図。
断面図の位置は第 5.1 図を参照。